

265(457)

高崎市文化財調査報告書 第265集

上中居・平塚遺跡 3

—事務所建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2010

高崎市教育委員会

か み な か い ひ ら つ か い せ き
上中居・平塚遺跡 3

－事務所建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2010

高崎市教育委員会

例 言

- 1 本報告書は事務所建築に伴い実施された「上中居・平塚遺跡第3次調査」(市遺跡調査番号457)の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査から報告書刊行に至るまでの一連の作業は、吉井モト 吉井みね子 吉井 徹諸氏の費用負担によって実施されたものである。記して感謝の意を表します。
- 3 発掘調査から整理作業に至る一連の作業は高崎市教育委員会の指導のもと、技研測量設計株式会社が実施した。
- 4 発掘調査に関する事項は以下の通りである。

遺跡所在地 高崎市上中居町49-1、50

監理指導 田口一郎 須田奈保子 角田真也(高崎市教育委員会)

調査担当 佐野良平(技研測量設計株式会社)

発掘調査期間 平成21年10月26日～平成21年11月10日

調査面積 688㎡

発掘参加者 桃藺正志(技研測量設計株式会社) 今井美智子 内島勝義 遠藤逸子 大川悦子 女屋みどり
佐藤百合子 竹澤賢司 平野ミツ子 本多和子 間庭啓治 矢内司郎 矢内ヒロ子 湯浅澄子

整理作業参加者 須藤香織 高山 愛 瀧澤佳子 長田友香

- 5 本書の編集は佐野が行い、原稿執筆の分担はIを田口、他を佐野が担当した。
- 6 本書はデジタル編集・組版により作成し、その作業は前田和昭(技研測量設計株式会社)が担当した。
- 7 プラントオパール分析はバリノ・サーヴェイ株式会社(馬場健司・千葉博俊)に依頼した。
- 8 本調査における図面・写真・遺物は、高崎市教育委員会にて保管している。
- 9 下記の諸氏・諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して感謝の意を表します(順不同、敬称略)。

坂口 一 日沖剛史 矢作健二 株式会社日勝情報センター 株式会社モアブレーション 神宮工業株式会社
山下工業株式会社

凡 例

- 1 全体図及び遺構平面図に示した方位は北に座標を示し、座標については世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅸ系を使用している。
- 2 挿図は国土地理院発行1/25,000『高崎』、高崎市発行1/2,500都市計画図を使用した。
- 3 土層の色調は『新版標準土色帖』(農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修)に基づいている。
- 4 各挿図の縮尺は、それぞれに付してある。
- 5 本書における各テフラ表記は下記の通りである。

As-A 浅間山Aテフラ(1783年降下) As-B 浅間山Bテフラ(1108年降下)

Hr-FA 榛名山二ツ岳渋川テフラ(6世紀初頭降下) Hr-FP 榛名山二ツ岳伊香保テフラ(6世紀中頃降下)

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の立地と環境	1
III 調査経過と方法	3
IV 基本層序	3
V 遺構と遺物	5
VI 上中居・平塚遺跡第3次調査の自然科学分析	6
VII まとめ	9
写真図版・抄録	

I 調査に至る経緯

平成 21 年 6 月、吉井モト氏（以下事業者）より高崎市教育委員会（以下市教委）に自動車販売の店舗及び修理工場建設予定地の埋蔵文化財の状況について照会があった。市教委は、照会地周辺の上中居平塚遺跡・岩押町遺跡等で平安時代水田遺構が検出されており、当該地にも及ぶ可能性が高いことから、試掘調査による確認を実施し工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。

同年 7 月 3 日付けで事業者より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年 8 月 6 日に工事予定地の試掘調査を実施し、平安時代の水田遺構を確認した。

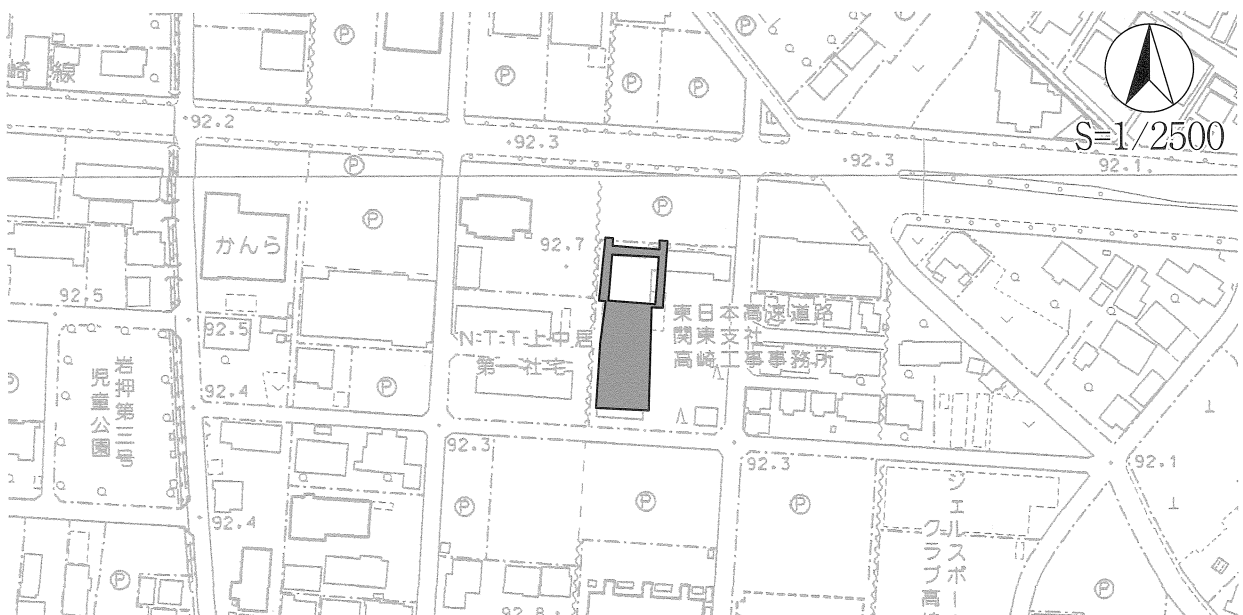
試掘結果を受けて、埋蔵文化財保護について事業者と協議を行ったが、建設予定の変更は不可能ということなので、文化財保護法第 93 条第 1 項の規定による届出に対する回答で、記録保存の発掘調査が必要であると指示を出した。

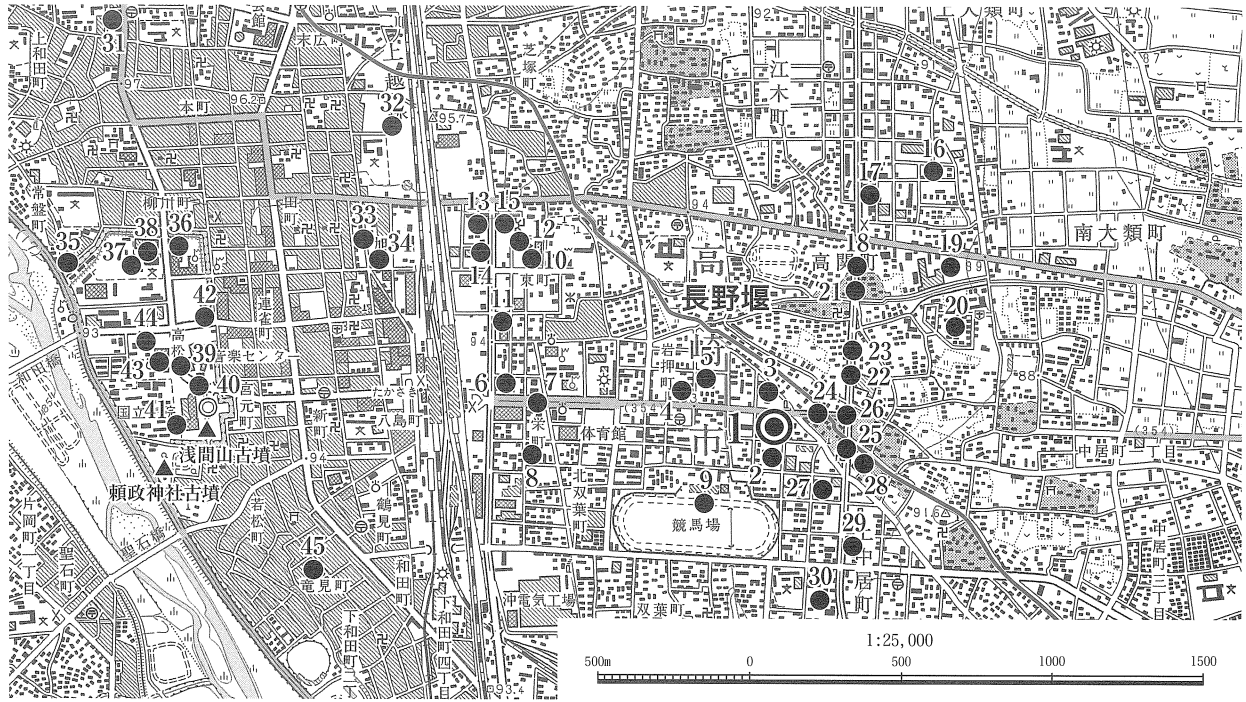
発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、技研測量設計株式会社に委託して実施することとなり、平成 21 年 10 月 21 日付けで高崎市長・事業者・技研測量設計の三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成 21 年 10 月 22 日付けで事業者と技研測量設計の二者で発掘調査委託契約が締結された。

II 遺跡の立地と環境

地理的環境 上中居・平塚遺跡は高崎市の中心部に近く、J R 高崎駅より東へ約 1.1km の上中居町内に位置する。遺跡北側には国道 354 号線、東側 250 m には高崎環状線がそれぞれ走っており高崎市街地の交通の要所でもある。昭和末期までは田畑が散在していたが、近年は市街地化が急激に進み宅地・商業施設の開発が多い地域である。現地の標高は 92.7 m を測り、北西から南西へ緩やかに傾斜している。遺跡の南西 1.9km には烏川、北東 1.3km には井野川が南東流し、北東方向 150 m のところには灌漑用水路である「長野堰」が南東流している。『群馬県史、群馬県内主要地域の地形分類図』によれば上中居地域は前橋台地の一部である高崎台地に立地する。榛名山水系である烏川・井野川の両河川に挟まれた台地上には小河川が流れ微高地と後背湿地とが入り組んだ地形を形成している。現在においては「長野堰」等の水路が本遺跡下流域の田園地帯を潤している。

歴史的環境 本遺跡周辺では昨今の市街地の再開発に伴い発掘調査事例が増え、周辺域の歴史が解明されつつある。以下では上中居・平塚遺跡周辺を時代ごとに概観したい。





第2図 周辺遺跡図

第1表 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	調査年度	As-B下水田跡	時代：主な遺構・出土遺物
1	上中居・平塚遺跡第3次調査	2009	○	本遺跡
2	上中居平塚Ⅰ遺跡	1996	○	
2	H18上中居平塚試掘調査	2006	○	
3	上中居平塚Ⅱ遺跡	1996	○	
4	岩押町Ⅰ遺跡	1994	○	近世：As-A下水田復旧痕
5	岩押町Ⅱ遺跡	1995	○	
6	栄町Ⅰ遺跡	1995	○	近世：As-A下水田復旧痕
7	栄町Ⅱ遺跡	1998	○	近世：As-A下水田復旧痕
8	栄町Ⅲ遺跡	2003	○	近世：As-A充填溝群
9	高崎競馬場	1969	○	弥生：住居跡
10	東町Ⅰ遺跡	1988	○	近世：土坑・溝
11	東町Ⅱ遺跡	1991	○	
12	東町Ⅲ遺跡	1993	○	弥生：溝・As-C下水田、古墳：Hr-FA・FP洪水層層下水田、近世：As-A下水田・復旧痕
13	東町Ⅳ遺跡	1994	○	弥生：土坑・溝、古墳：Hr-FA・FP洪水層層下水田、中近世：溝
14	東町Ⅴ遺跡	1995	○	近世：As-A下水田復旧痕、近世：近代工場跡地
15	東町Ⅵ遺跡	1999	○	
16	高岡塚田沖遺跡	1991	○	
17	高岡北沖遺跡	1991	○	
18	高岡東沖・村前遺跡	1993、1994	○	弥生：住居跡、古墳：住居跡、奈良：水路、中世以降：掘立柱建物跡・井戸・水路
19	高岡東沖Ⅱ遺跡	1995	○	
20	岡久保遺跡	1987	○	
21	高岡塚村遺跡	1991	○	弥生：環濠、中近世：環濠屋敷跡
22	高岡村前遺跡	1993	○	弥生：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：掘立柱建物跡、中世：掘立柱建物跡
23	高岡村前遺跡Ⅱ	1993	○	中世：掘立柱建物跡・井戸・水路
24	上中居早道場遺跡	1992	○	中近世：溝・井戸
25	上中居辻薬師遺跡	1988	○	中世：環濠屋敷跡（反町屋敷）
26	上中居辻薬師Ⅱ遺跡	1992、1993	○	古墳：周溝墓・水路、中世：環濠屋敷跡（反町屋敷）・墓坑
27	上中居西屋敷遺跡	1993	○	
28	上中居西屋敷Ⅱ遺跡	1996	○	近世：As-A下水田復旧痕
29	上中居西屋敷Ⅲ遺跡	1997	○	
30	上中居荒神Ⅰ遺跡	1996	○	
31	住吉町Ⅰ遺跡	1991	○	
32	江木諏訪西遺跡	1994	○	古代：溝、近世：溝
33	真町Ⅰ遺跡	1995	○	平安：洪水層下水田、近世：As-A下水田復旧痕、城下町、遠溝
34	旭町Ⅰ遺跡	1995	○	
35	高松町遺跡	-	○	弥生：弥生土器
36	高松第1駐車場遺跡	1988	○	近世：大型家屋跡
37	高崎城Ⅰ	1985	○	近世：城郭遺構
38	高崎城Ⅱ	1986	○	近世：城郭遺構
39	高崎城Ⅲ・Ⅳ	1986～88	○	弥生：溝、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡、近世：城郭遺構
40	高崎城Ⅴ・Ⅵ	1989	○	弥生：周溝墓・住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡、中世：堀、近世：城郭遺構
41	高崎城Ⅶ	1990	○	弥生：環濠、平安：住居跡、中世：地下式坑・井戸、近世：城郭遺構
42	高崎城Ⅷ	1990	○	近世：城郭遺構
43	高崎城Ⅸ	1991	○	近世：城郭遺構
44	高崎城Ⅹ	1991	○	中世：地下式坑、近世：城郭遺構
45	竜見町遺跡	1935	○	弥生：「竜見町式土器」指標遺跡

旧石器時代・縄文時代の遺跡に関しては高崎台地上の当地域ではあまり知られておらず、むしろ烏川南西部に位置する観音山丘陵や河川の段丘上に遺跡が分布する。

弥生時代中期になると烏川左岸の河岸段丘や高関町周辺の微高地上に人々が集落を形成し始めるが、後期になると北東方向の井野川流域へと集落が移動していくため当地域の集落は短命的である。代表的な遺跡として、中期後半の甕・壺が出土している高崎競馬場遺跡（9）、中期後半の標識遺跡である竜見町遺跡（45）、環濠が確認された高関堰村遺跡（21）や高崎城Ⅶ（41）、As-C 下水田が確認されている東町Ⅲ遺跡（12）などが挙げられる。

古墳時代には微高地上の集落域が拡大し、東町Ⅲ・Ⅳ遺跡（12・13）のような後背湿地に水田を営み生産域とした。高関東沖・村前遺跡（18）、高関村前遺跡（22）、高崎城Ⅲ～Ⅵ（39・40）で概期の住居跡が確認されている。また烏川左岸の河岸段丘上には浅間山古墳（径 50 m の円墳、6 世紀か）や頼政神社古墳（径 20 m の推定円墳、6 世紀か）等の古墳が出現する。

古代においては天仁元年（1108）に浅間山から噴出した軽石によって埋没した水田、所謂 As-B 下水田跡が地域の平野部に広く分布している。広大な生産域がある反面、概期の集落域は高関村前遺跡（22）、高崎城Ⅲ～Ⅵ（39・40）などでみられる程度であり明確にされていない。

中世においては高関堰村遺跡（21）、高関村前遺跡（22）、高関村前遺跡Ⅱ（23）では環濠屋敷跡、上中居辻薬師遺跡（25）、上中居辻薬師Ⅱ遺跡（26）では「反町屋敷」といわれる中世居館跡が確認されている。また現在の「長野堰」の基となる開発は戦国時代の長野氏が整備したという伝承がある。

近世になると慶長三年（1598）井伊直政が箕輪城から高崎城へと拠点を移したことにより城下町が形成される。現在の JR 高崎駅西口周辺を中心に町屋や社寺が建ち並び賑わい、また中心部に中山道が通り宿場としても繁栄する。その後高崎城は明治から第二次世界大戦終戦までの間日本陸軍の駐屯地として使用された。

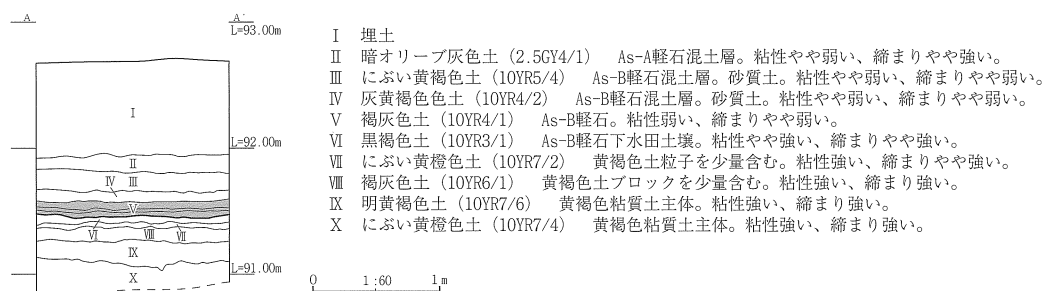
Ⅲ 調査経過と方法

第2表 調査経過

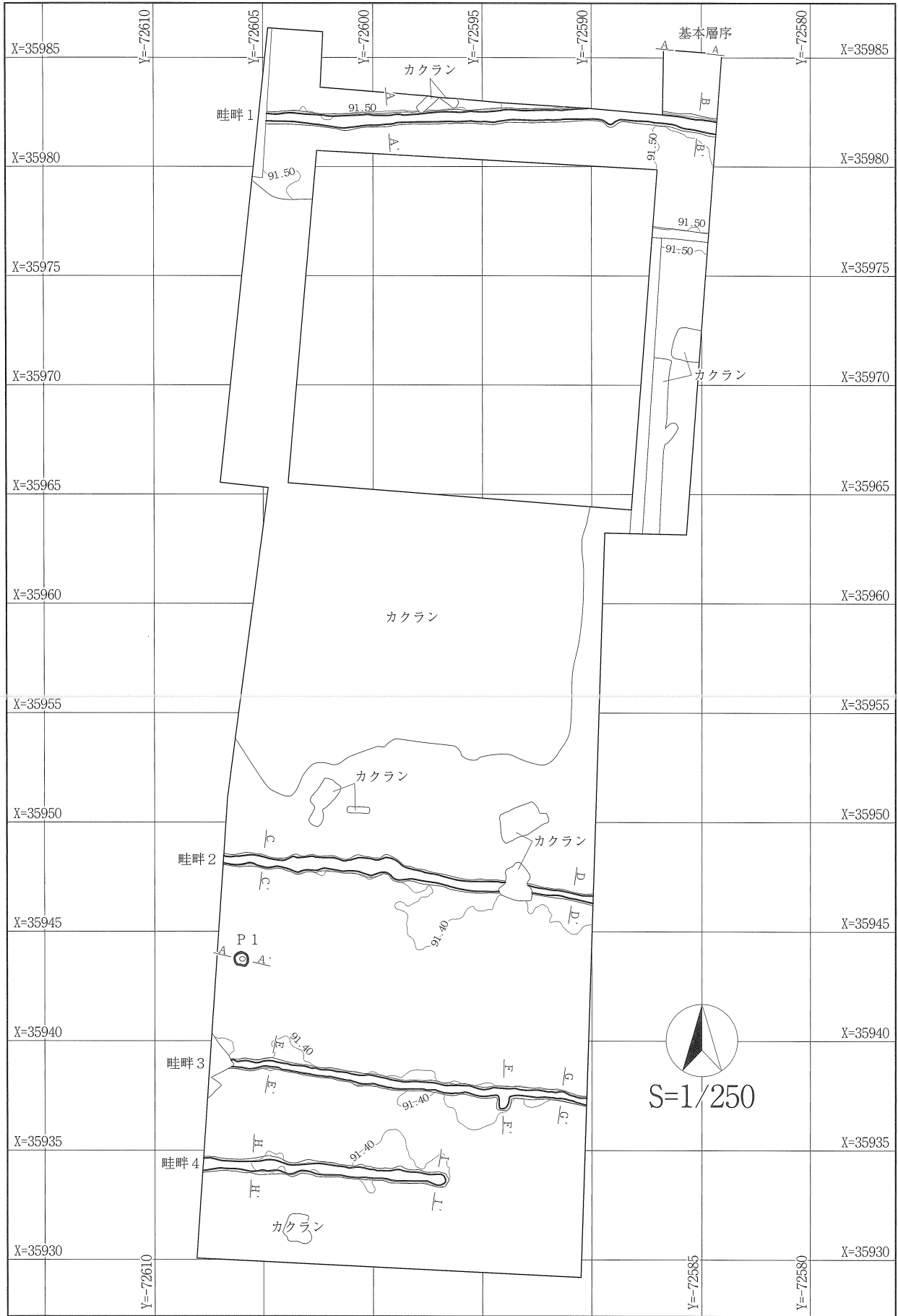
	10/26	27	28	29	30	31	11/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
表土掘削																
遺構確認・掘削																
測量																
全景撮影																

Ⅳ 基本層序

本遺跡の層序は調査区的全壁面において観察を行い、概ね堆積状況が同一であることから調査区北東隔壁面の状況を図示した。



第3図 基本層序



第 4 図 調査区全体図

V 遺構と遺物

As-B 下水田跡

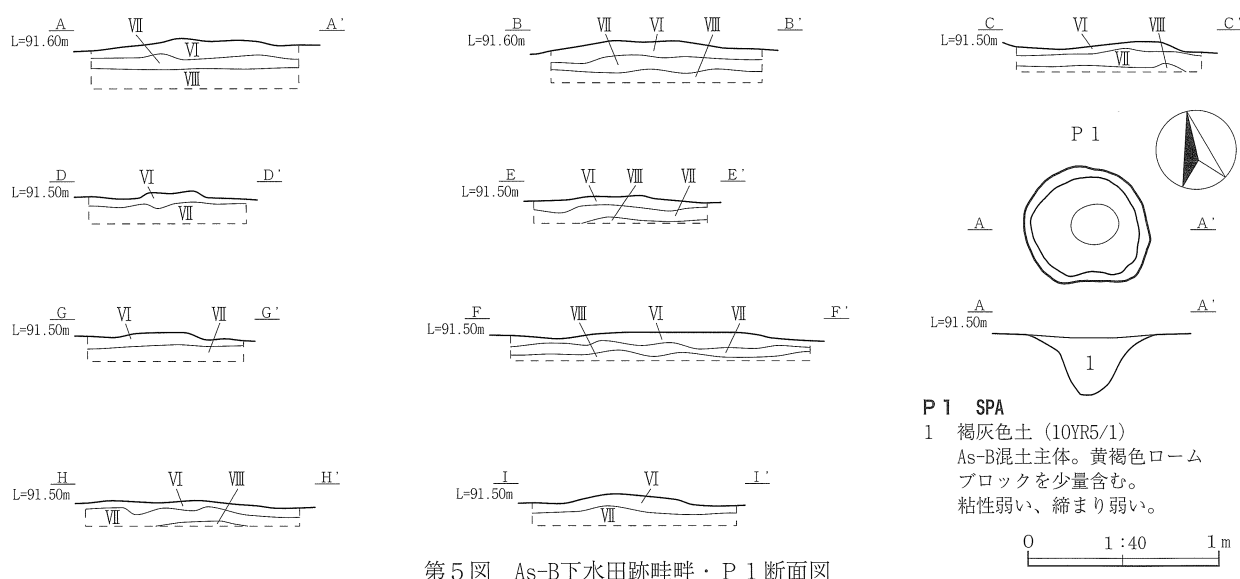
今回検出された As-B 下水田跡は、調査区の約半分が後世の攪乱によって消失しているが、残存する箇所は浅い凹凸が見られる程度で概ね平坦である。水田跡を直接覆う As-B 軽石は 5～15cm の厚さで堆積しており良好な状態である。出土遺物は皆無に等しく、人や牛馬の足跡も確認できなかった。また今回調査に至らなかった調査区北側中央部については、周辺状況からみて大部分が攪乱されているものと推測される。

水田域の地形は調査区北側で標高 91.48 m、調査区南側 91.39 m、比高差約 0.1 m を測り、調査区北西から南東へ向かって緩やかに傾斜する。取水方向は地形の状況を鑑みると北方向から引水するのが妥当であると想定される。水口は確認されなかったが、北→南の導水が想定されるため水田面北・南側の畦畔にそれぞれ設置されていたものと考えられる。

畦畔は調査区内で東西 4 条確認された。軸方向はほぼ同一で、上幅 23.4～77.4cm、下幅 40.8～88.2cm をそれぞれ測る。畦畔間の距離は畦畔 1～2 で 35.24 m、畦畔 2～3 で 9.42 m、畦畔 3～4 で 4.08 m である。規模・検出状況からこの畦畔は坪境の大畦畔ではなく坪内を区画する小畦畔であると考えられる。本遺跡の北西方向に位置する岩押町 I 遺跡（高崎市遺跡調査会 1994）で確認された水田跡は、畦畔間距離が約 10 m 前後にあり、方格地割を「長地型」と比定している。本遺跡の調査結果からは、方格地割において「長地型」「半折型」と積極的に判断できる状況ではない。畦畔 1～2 はやや距離が長いため、あと 2 条程度の東西畦畔が想定されるが、攪乱が多いため検出には至っていない。水田面との比高差は 1～4 cm と僅かで、断面形状はやや潰れたような台形状を呈している。畦畔の残存状況から埋没直前に水田耕作が行われていたという事はやや疑問を感じる。

P 1

調査区南西部で検出された。底部は水田面下にまで達しているものの、覆土は As-B 軽石混土層を主体としていることから、軽石層より上位から掘り込まれたと推測できる。出土遺物は無いものの、覆土等の状況から中世以降のピットと考えられる。



VI 上中居・平塚遺跡第3次調査の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

群馬県高崎市上中居町に所在する上中居・平塚遺跡は、烏川と井野川に挟まれた台地（狭義の高崎台地）上に立地する。高崎台地上は、中小河川の開析によって形成された微高地および後背湿地が分布しており、地形分類図（早田,1990）によれば本遺跡付近は後背湿地に分類されている。本遺跡の発掘調査では、浅間Bテフラ下位より数条の東西に延びる畦畔が検出されており、古代末頃には生産域として利用されていたことが明らかとされている。

本報告では、浅間Bテフラ下位より検出された水田跡における栽培植物の検討を目的として、自然科学分析調査を実施する。

1. 試料

試料は、発掘調査区の南壁と北東壁（基本層序観察地点）に認められた堆積層より採取した土壌である。以下に、上記した各地点の観察所見を記す。

(1) 南壁 観察範囲は、地表面から深度約121cmまでの堆積層である。最下位は、灰色シルトであり、上部は黒～黒灰色シルトからなる。層界は、後述する北東壁地点と異なり漸移的である。黒～黒灰色シルト上位には、1108（天仁元）年の浅間火山の噴火により噴出した浅間Bテフラ（As-B;新井,1979）の降下堆積層が確認される。As-B上位には、As-B混じりの暗褐色砂、灰褐色シルト質砂、灰褐色砂混じりシルト、軽石混じりの黒～黒灰色シルトが堆積する。なお、本遺跡の調査区西壁の堆積層では、As-Bとともに、1783（天明3）年の浅間火山の噴火により噴出した浅間A軽石（As-A;新井,1979）の降下堆積層が確認されている。黒～黒灰色シルトに混じる軽石は、堆積物の累重や軽石の特徴からAs-Aと判断される。黒～黒灰色シルト上位は、整地等に伴う盛土である。

本地点では、As-Bの降下堆積層直下の黒～黒灰シルト（試料1）および灰色シルト（試料2）より土壌採取している（図1）。

(2) 北東壁 観察範囲は、地表面から深度約146cmまでの堆積層である。最下位はやや径の大きい管状酸化鉄が発達する暗褐～灰褐色を呈する砂（中粒～細粒砂）混じりシルトであり、上部は極細粒砂混じりの灰色シルトからなる。灰色シルト上位は、黒～黒灰シルトが堆積し、同堆積物中には灰色シルトに由来するとみられる偽礫

が混じる。黒～黒灰シルト上位には、As-Bが堆積し、さらに上位にはAs-B混じりの暗茶褐色砂、灰色砂質シルト、As-A混じりの灰色シルトが堆積する。灰色砂混じりシルト上位は、整地等に伴う盛土である。

本地点では、南壁と同様にAs-Bの降下堆積層直下の黒～黒灰シルト（試料1）および灰色シルト（試料2）より土壌試料を採取している（図1）。

本分析では、上記した目的に基づき、各地点のAs-B直下より採取した黒～黒灰色シルト（北東壁 試料1,南壁 試料1）を対象に植物珪酸体分析を行う。

2. 分析方法

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重

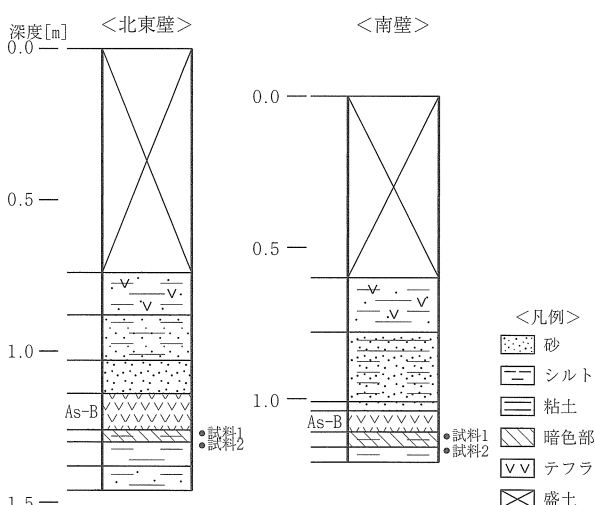


図1. 北東壁・南壁の模式柱状図および試料採取位置

液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体）を、近藤（2004）の分類に基づいて同定・計数する。分析時には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の表および図で示す。各分類群の含量は 100 単位として表示し、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に 100 単位として表示する。

3. 結果

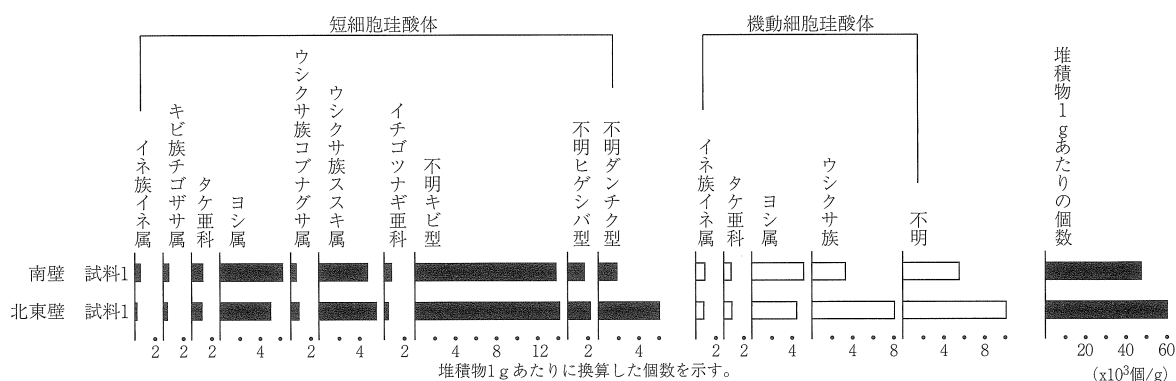
結果を表 1、図 2 に示す。検出された植物珪酸体は、いずれも保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

南壁 試料 1 は、植物珪酸体含量が約 4.7 万個 /g である。栽培植物のイネ属が検出され、その含量は短細胞珪酸体が約 600 個 /g、機動細胞珪酸体が約 900 個 /g である。栽培種を除く分類群では、チゴザサ属、タケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が検出される。これらの分類群では、ヨシ属やススキ属の含量が高い。

北東壁 試料 1 は、植物珪酸体含量は約 6.0 万個 /g と南壁と比較してやや高い。栽培植物のイネ属が検出されるが、その含量は短細胞珪酸体が約 200 個 /g、機動細胞珪酸体が約 800 個 /g と、南壁と比較して低い。栽培種を除く分類群では、チゴザサ属、タケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が検出され、南壁試料と同様にヨシ属やススキ属の含量が高い。

表 1. 植物珪酸体含量 (個/g)

分類群	試料	
	南壁 試料1	北東壁 試料1
イネ科葉部短細胞珪酸体		
イネ族イネ属	600	200
キビ族チゴザサ属	600	400
タケ亜科	1,100	1,000
ヨシ属	6,300	5,000
ウシクサ族コブナグサ属	600	800
ウシクサ族ススキ属	4,800	5,700
イチゴツナギ亜科	700	400
不明キビ型	13,800	14,100
不明ヒゲシバ型	1,700	2,200
不明ダンチク型	1,800	6,100
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
イネ族イネ属	900	800
タケ亜科	700	800
ヨシ属	5,100	4,400
ウシクサ族	3,300	8,100
不明	5,500	10,100
合 計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	31,800	35,900
イネ科葉身機動細胞珪酸体	15,600	24,200
総 計	47,400	60,100



4. 考察

本遺跡周辺では、隣接する上中居平塚 I 遺跡をはじめとして、上中居西屋敷遺跡、上中居前屋敷遺跡、東町遺跡などの各遺跡で当該期の水田跡が検出されている。このうち、これらの水田跡を対象とした分析調査が行われた主な遺跡のイネ属の機動細胞珪酸体含量をみると、上中居平塚 I 遺跡は約 4,600 個 /g および約 6,100 個 /g、上中居西屋敷 III 遺跡は約 1,500 個 /g および約 3,100 個 /g、東町 IV 遺跡では約 700 ~ 4,600 個 /g、東町 VI 遺跡では約 800 個 /g という結果が得られている（高崎市遺跡調査会, 1998; 株式会社古環境研究所, 1995・1996・2000）

など)。

本遺跡の As-B 直下の黒～黒灰色シルト (南壁 試料 1, 北東壁 試料 1) からは、イネ属が検出されたが、機動細胞珪酸体含量は約 800～900 個/g と、上記した当該期の水田跡における産状と比較しても低い値であった。堆積層の観察では、水田跡は As-B テフラに被覆される状況が確認されていることから混入等の可能性は低いと考えられ、当該期の稲作に伴うイネの植物珪酸体の蓄積が推定される。イネ属の含量が低かった点については、稲作の期間が短いあるいは堆積速度が速いなどの要因により土壌中にイネ属の植物珪酸体が蓄積されにくかった可能性がある。

また、黒～黒灰色シルトではヨシ属やススキ属の含量が高い値を示したことから、調査地および周辺の湿潤な場所にはヨシ属が、やや乾燥した場所にはタケ亜科やススキ属などが生育したと推定される。なお、上記した各遺跡の As-B 下の堆積層ではヨシ属が卓越する傾向が確認されている。また、上中居平塚 I 遺跡の As-B 直下層における花粉分析結果では、草本花粉の占める割合が高く、水湿地植物のガマ属-ミクリ属の産出や、多産したイネ科やカヤツリグサ科にも多くの水湿地植物が含まれることから、周辺は水湿地植物が繁茂する湿地環境であったことが推定されている。

今回の分析結果は、これまでの調査結果と概ね調和する傾向であり、水田利用以前あるいは水田雑草として生育したイネ科草本類の様相を示していると考えられる。また、南壁や北東壁に確認された As-B 直下の黒～黒灰色シルトは、杉山 (2004) が指摘する腐植土層と類似することから、荒廃田などの様相を示している可能性もある。

引用文献

- 新井房夫,1979,関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層,考古学ジャーナル,157,41-52.
- 株式会社古環境研究所,1995,東町 III・IV 遺跡の自然科学分析報告,「高崎市文化財調査報告書第 138 集 東町 IV 遺跡 高崎市都市計画事業東口第二土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,高崎市教育委員会,15-28.
- 株式会社古環境研究所,1996,自然科学分析,「高崎市遺跡調査会報告書第 47 集 上中居平塚 I 遺跡 浅間 B 軽石埋没水田跡の発掘調査報告書」,高崎市遺跡調査会,7-14.
- 株式会社古環境研究所,2000,高崎市、東町 VI 遺跡における自然科学分析,「高崎市遺跡調査会調査報告書第 78 集 東町 VI 遺跡 -高崎駅東口第 8 地区優良建築物建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,高崎市遺跡調査会,1-7.
- 近藤 鍊三,2004,植物ケイ酸体研究,ペドロジスト,48,46-64.
- 早田 勉,1990,第一章 群馬県の自然と風土 付図 2 群馬県内主要地域の地形分類図,群馬県史 通史編 1 原始古代 1,群馬県,39-129.
- 杉山 真二,2004,自然科学分析が語る平安時代末期の水田跡,「かみつけの里博物館 第 12 回特別展 1108-浅間山噴火-中世への胎動 展示解説図録」,かみつけの里博物館,57-61.
- 高崎市遺跡調査会,1998,自然科学分析,「高崎市遺跡調査会報告書第 70 集 上中居西屋敷Ⅲ遺跡 店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,高崎市遺跡調査会,6-7.

Ⅶ まとめ

上中居・平塚遺跡第3次調査ではAs-B下水田跡が確認された。As-B下水田跡の調査は県内平野部で数多く調査されており、各種の開発に伴う発掘調査によって調査事例も増加している。確認されたAs-B下水田跡は方格地割の条里水田であるため各地で条里地割の推定が行われているが、当地域では坪境である大畦畔の検出例が少なく方格地割復元が困難な状況である。以下では本遺跡周辺で検出された水田跡の調査結果と合わせて当地域における水田経営の検討を行いまとめとしたい。

天仁元(1108)年、浅間山が噴火し上野国を中心に火山灰が降り注ぎ、「国内の田畠が壊滅」(中右記)状態となった。この火山灰によって埋没した水田、所謂As-B下水田跡は高崎市街地域に拡がっており、本遺跡が立地する上中居町周辺でも検出されている。まず本遺跡周辺で確認された水田跡の検出状況について触れたい。上中居平塚Ⅰ遺跡では南北畦畔1条、東西畦畔2条確認された。水田面は概ね平坦で起伏はみられず、畦畔高も5cm弱とわずかである。上中居平塚Ⅱ遺跡では畦畔の検出は無く水田面のみ確認されている。岩押町Ⅰ遺跡では南北畦畔1条、東西畦畔10条と12の水田面が確認されている。東西畦畔は全て南北畦畔との交点でT字状に止まる。これは地形の変化や条里分割の乱れによる影響と考えられる。畦畔高は5cm前後である。岩押町Ⅱ遺跡では東西・南北畦畔と水口の他に斜方向の畦畔が確認されている。畦畔高は3cm前後である。本遺跡と上中居平塚Ⅰ遺跡との中間地域において試掘によるトレンチ調査が行われている⁽¹⁾。全てのトレンチで水田面、一部で東西・南北の畦畔が確認されており、扁平でつぶれたような状態である。以上、周辺遺跡の事例を基に本遺跡の水田跡を観察すると平坦な水田面、わずかな高まりの畦畔、畦畔方向が東西・南北等の周辺域の水田跡と同様の様相を示している。畦畔高が低い状況は荒廃田や耕作の停止等を示すと考えられる。自然化学分析の結果でもイネ属の植物珪酸体含有量は他遺跡水田跡と比べ少なく、ヨシ属やススキ属等の湿潤・乾燥地帯に生育する植物が繁茂していた可能性が高い。しかし本遺跡西約800mにある栄町Ⅲ遺跡では約10cm前後の明瞭な高まりをもつ畦畔が確認されており、自然科学分析においてもイネ属の植物珪酸体含有量は多いため、栄町Ⅲ遺跡周辺では水田経営が継続されていたと考えられる。以上のことから当地域はAs-B軽石降下時には地域・局地的に水田経営が継続・停止していたと想定される。畦畔は各遺跡概ね同方向のものが確認されているが条里復元するには困難で、軸となる大畦畔が検出されていないことが大きな要因の一つとなっている。水田面は平坦で北西から南東へと標高が下がり、取・配水においても同方向で行われていたと考えられる。

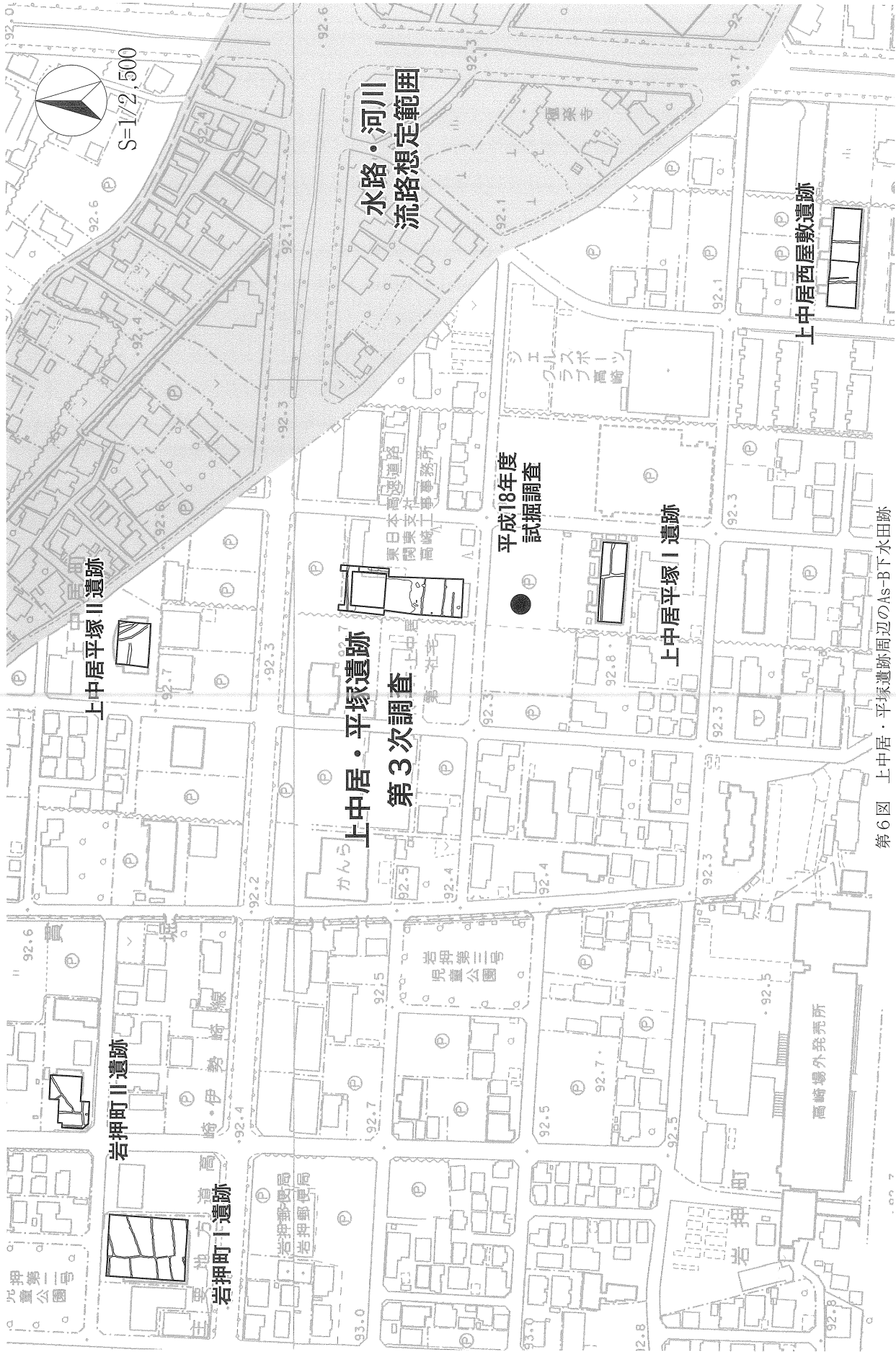
次に本遺跡水田跡への水の供給元について考えてみたい。本遺跡周辺では古代まで遡る水源と考えられる遺構は確認されていない。上中居地区の「長野堰」は微高地と後背湿地の境を流れており、古代期に水田へ水を供給していた水源(水路・河川)もそういった所を流れていたと考えられる。尚、「長野堰」については古代期の姿は考古学的には解明されておらず、現在の姿は中世以降に整備されたものである。

今回の調査結果は当地域の水田経営の一端にすぎず、総合的な理解には至っていない。上中居地域の水田跡研究においては条里区画の検討・古代期の水源地等の課題が多い。特に坪境の大畦畔の検出は条里を組む上で必要な要素である⁽²⁾。今後周辺地域での調査・研究によって上中居地域における水田経営が解明されることを願いたい。

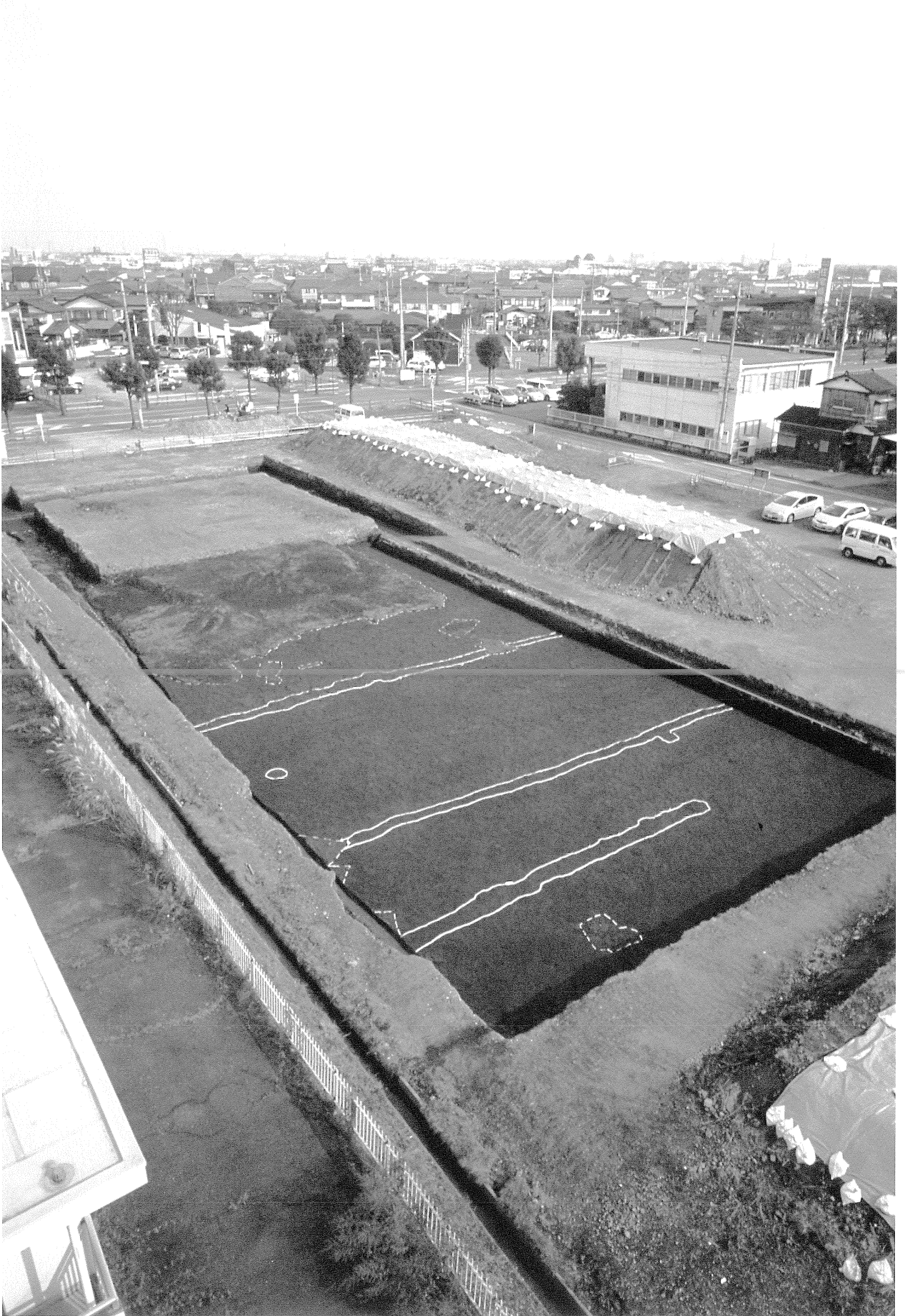
註

(1) 高崎市教育委員会 2007 『平成18年度 市内遺跡発掘調査報告書』

(2) 坂口一氏のご教授によれば岩押町内の高崎駅東口線(本遺跡北側)の道路整備に伴う発掘調査(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)において東西方向の大畦畔が検出されている。調査中であるため報告が待ち望まれる。



第6図 上中居・平塚遺跡周辺のAs-B下水田跡



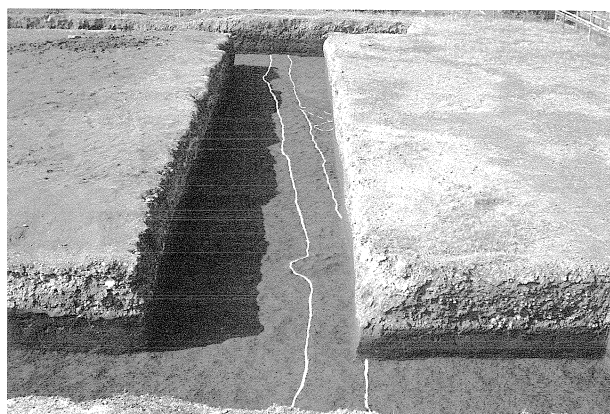
調査区遠景（南西から）



As-B下水田跡全景（上が北）



調査区南側As-B下水田跡全景（東から）



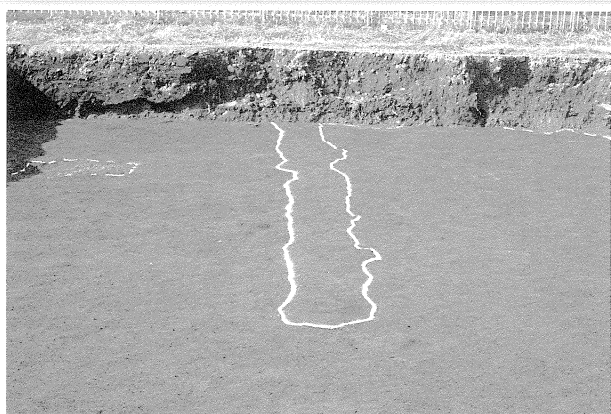
畦畔1全景（東から）



畦畔2全景（東から）



畦畔3全景（東から）



畦畔4全景（東から）



基本層序（調査区北東壁）

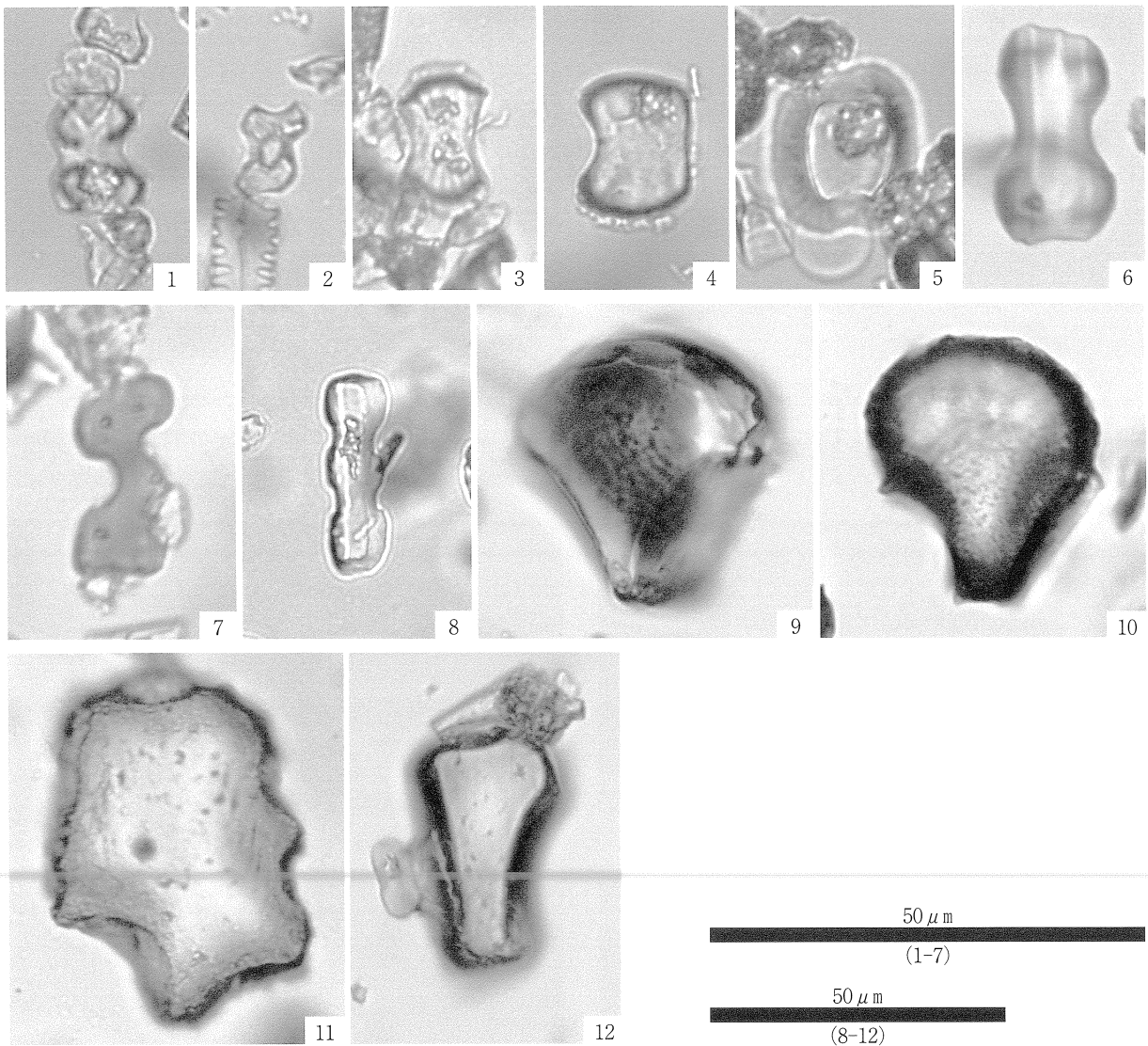


調査風景（南から）



調査風景（東から）

植物珪酸体



- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(南壁;1) | 2. イネ属短細胞珪酸体(北東壁;1) |
| 3. チゴザサ属短細胞珪酸体(南壁;1) | 4. タケ亜科短細胞珪酸体(北東壁;1) |
| 5. ヨシ属短細胞珪酸体(南壁;1) | 6. コブナグサ属短細胞珪酸体(南壁;1) |
| 7. ススキ属短細胞珪酸体(北東壁;1) | 8. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(南壁;1) |
| 9. イネ属機動細胞珪酸体(南壁;1) | 10. イネ属機動細胞珪酸体(北東壁;1) |
| 11. ヨシ属機動細胞珪酸体(南壁;1) | 12. ウシクサ族機動細胞珪酸体(南壁;1) |

発掘調査抄録

ふりがな	かみなかいひらつかいせき3
書名	上中居・平塚遺跡3
副書名	事務所建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	-
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第265集
編著者名	佐野良平
編集機関	技研測量設計株式会社
発行機関	高崎市教育委員会
発行機関所在地	〒370-8501 高崎市高松町35-1
発行年月日	西暦2010年4月30日

ふりがな	ふりがな	コード		位置		調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
かみなかい ひらつかいせき 上中居・平塚遺跡 第3次調査	たかさしかみなかいまち 高崎市上中居町 49-1、50	102020	457	36° 19' 5	139° 1' 40	20091024 } 20091110	688㎡	事務所建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上中居・平塚遺跡 第3次調査	水田跡	平安時代 中世以降	As-B下水田跡 ピット 1基		

高崎市文化財調査報告書 第265集

上中居・平塚遺跡 3

2010年4月16日 印刷

2010年4月30日 発行

発行

高崎市教育委員会

〒370-8501 群馬県高崎市高松町35-1

TEL 027-321-1292

編集

技研測量設計株式会社

印刷

朝日印刷工業株式会社